

# 三野町の方言

方言班 (徳島県方言学会)

金沢 浩生<sup>\*1</sup> 仙波 光明<sup>\*2</sup> 岸絵 信介<sup>\*2</sup> 石田 祐子<sup>\*3</sup>

## はじめに

以下に、今回の調査で確認されたことばを中心に、三野町方言の諸特徴を述べる。今回の報告は、2002年7月23・27両日、三野町公民館で採録した談話(後に記す方言教示者の方々による)を主な資料として分析し、さらに金沢が独自に行った調査に基づいている。

## 1. 三野町の方言区画上の位置づけ

三野町は、方言区画上、上郡里分かみごおりさとぶんに位置づけられる(森重幸 1982)。上郡には、美馬・三好両郡が含まれるが、その中の山城・祖谷・一字地域については北方山分として別区画になっている。また、上郡のうち、昼間、箸蔵、池田より西側の地域、および吉野川南岸地域のうち山間部は中分として、上郡里分の脇町、美馬町、三野町、三好町などとは別区画に区分される。

## 2. 音声

### 1) 「セ」の音

サ行の「セ」の音は、西日本一帯で「シェ」[ʃe]になる地域が多いのに対して、徳島県下では上郡で「シェ」の使用が少ないことが知られてきた。今回の調査でも、先生(センセイ)、千円(センエン)、五十銭(ゴジッセン)、などの「セ」は、はっきりした「セ[se]」であった。

### 2) 「ツ」の音

まれにはあるが、「ツ」の音が破裂音[tsu]では

なく、破裂音[tu]に発音されるか、または[tsu]の摩擦がきわめて弱く発音されることがある。「夏」を[natu] (ナトウ)、「正月」を[ʃoŋgatu] (ションガトウ)と発音するなどの例がある。なお、森(1982)には、上郡山分とうわてで「イツロー(行っただろう)」の「ツロー」(過去推量)の場合に[tu]が現れるとの指摘がある。

### 3) 濁音の前の鼻音・ガ行鼻濁音

ダ行音の前に鼻音が現れる現象は、徳島県下に広く観察できる(小野1999、金沢他2000・2001・2002)が、三野町では、ダ行音の前の鼻音は下郡山分や鳴門、吉野、穴吹での観察結果に比べて軽いものであって、少しの注意ではっきり「ン」の音が誰にでも聞き取れるというものではないことが多い。

- 子供 → コッドモ
- 総代 → ソーダイ
- 丁度 → チョーンド
- 指導 → シッドー

また、ガ行音については、上郡のほとんどの地域が鼻濁音でない[ga]と発音される(平山他 1992)か、または鼻濁音の少ない地域(森 1982)とされてきた。今回の談話録音資料からは、次のような言葉のガ行が鼻濁音で発音されたのを確認できた。

- あげ柿 → [a<sub>ŋ</sub>e<sub>ŋ</sub>aki]
- 削ぐ → [so<sub>ŋ</sub>u]
- するのが → [suruno<sub>ŋ</sub>a]

この3例は、鼻濁音がはっきり聞き取れたものであるが、他にも軽い鼻濁音の認められる発音が観察できた。また、他の機会ではあるが、比較的高齢の男

\*1 徳島市北矢三町1-3-2 \*2 徳島大学総合科学部 \*3 鴨島町役場

性の談話の中に、「クギガ（釘が）」が「クンガ」となる発音を観察しており、この地域に語中語尾のガ行鼻濁音が用いられていたことが推測できる。

#### 4) 合拗音

合拗音ごうようおんの「クワ[kwa]・グワ[gwa]」が高年齢層に聞かれた。

- 一貫目 → イックウンメ
- 三回 → サンクワイ
- 管理 → クワンリ
- 老人会 → ロージンクワイ
- 換金作物 → クワンキンサクモツ
- 化学 → クワガク

なお、西瓜（スイクワ）は年齢に関係なく、合拗音であった。

#### 5) ラ行音の前の促音

日本語の促音（ッ）は無声子音（カ・サ・タ・パ各行の子音）の前以外には現れないとされるが、三野町の話者の談話の中には、ラ行音の前の促音が聞かれた。

- ウツリヨル（売りよる＝売っている）

なお、しばしば撥音（ン）かどうかの判断に迷う例もあった。例えば、「作りよる」は、「ツクツリヨル」「ツクンリヨル」両形が確認できた。

#### 6) タ行音（チ・ツ）の促音化

たまたま現れた臨時的な現象かも知れないが、助詞「デ」の前のチ・ツが促音になるのが観察された。

- 先達で → センダッデ
- 口で → クッデ

#### 7) サ・ザ行音の拗音化

- 世話 → ショワ
- 時分 → ジュブン
- 草履 → ジョーリ

上記の例が見つかった。なお、ショワは、和歌山・広島・島根・瀬戸内・大分に確認でき、ジュブンは、淡路・香川等に記録がある。ジョーリについては、16世紀末の日本語を反映する『日葡辞書』にあり、こちらが一般的な言い方であったことが記されている。

#### 8) 連母音の長母音化

母音イとエが連続するとエーになる（/ie/ > /e:/）ことがある。ミエル（見える）→メール、キエル

（消える）→ケール等である。

#### 9) 母音の交替

- a → u タバコ（煙草） → タブコ
- i → e ニナイ（担桶） → ニナエ
- オサイ（お菜） → オサエ
- i → u シニクイ（し難い） → シヌクイ
- u → o ヤツ（奴） → ヤト

### 3. アクセント

#### 1) アクセント体系

三野町アクセントは、県西部の池田町、三加茂町、三好町などと同様、讃岐式アクセントに近く、京都・大阪などに代表される中央式に近い徳島市アクセントとは異なる。以下に、三野町のアクセント体系を示す。音声レベルでの音調表記として、●=高、○=低、△・▲は付属語を示す。

#### 非上昇式

○○ ○○○ ○○○○ ○○○○○ ○○○○○○  
 ○] ○ ○] ○○ ○] ○○○ ○] ○○○○ ○] ○○○○○  
 ○○○] ○ ○○○] ○○ ○○○] ○○○ ○○○] ○○○○  
 ○○○○] ○ ○○○○○] ○

#### 上昇式

○○ ○○○ ○○○○ ○○○○○ ○○○○○○  
 ○○] ○○○] ○ ○○○] ○○ ○○○] ○○○ ○○○] ○○○○  
 ○○○] ○ ○○○] ○○ ○○○] ○○○ ○○○] ○○○○  
 ○○○○○] ○ ○○○○○] ○

三野町のアクセントは、二つの式（非上昇式・上昇式）と核の有無（あればその位置）で弁別されるという特色があり、音韻論的レベルでは、中央式、讃岐式とも同じであると言っても過言ではないが、音声レベルでは、具体的には次のような違いが認められる。

2拍名詞中、第3類所属語彙「犬、色、家、浜、毒、月、炭、谷、貝、靴、雲、腕、鬼、舌、墓」等は、傾向として、徳島市アクセントの●○△（高高低）が現れることが少なく、讃岐式の●●▲（高高中となることが多い）で実現することが多い。ただし、第3類所属語彙がすべて同じ傾向となることは

むしろ少なく、語によっては●○△、●●▲（高高中型を含む）になる。

3拍名詞第6類に所属する語彙「油、宝、枕、男」等は、徳島市が頭高型●○○△～頭高二型●●○△であるのに対して、●●●▲（或いは高高中型）で実現することが多いのも、讃岐式と共通する特徴である。このような対立は、4拍語以上の語においてもみられ、徳島市で●●○○△～●●●○△型、三野町および県西部で●●●▲型（或いは高高中中式）となるものを上げると、「雑巾、栓抜き、爪切り、焼酎」等である。ただし、吉野川流域での分布上の対立など、語によって差がある。

二拍動詞「買う・着る」等、徳島市アクセントで●●型が、三野町および県西部では●○型となることが多い。

三拍動詞「困る、余る、思う」等で、徳島市では●○○型、三野町および県西部で●●●型（或いは高高中型）で実現することが多い。4拍動詞においても同種の対立がみられ、「喜ぶ、調べる」等は徳島市アクセントで●○○○、三野町および県西部で●●●▲型（或いは高高中中式）となる。

## 2) アクセントに関する個別の現象

① 談話中でのアクセントがゆれている例や、上に述べた体系からはずれて下郡式等になる場合が観察された。

ハト（鳩）、フロ（風呂）は、ともに○●（低高）と●●（高高）が、ミセ（店）は、●●（高高）だけでなく●○（高低）も現れている。カトー（硬く）は、昭和生まれの女性では●○○（高低低）であったのに対して、明治生まれの女性は○●●（低高高）の発音であった。その他、トマル（泊まる）、トビコム（飛び込む）、フミコム（踏み込む）、ヨロコブ（喜ぶ）、コシラエル（拵える）等が、いずれも1拍目が高い頭高で発音され、下郡と共通の様相を見せている。

② 単語単位で確認できるアクセントと異なるアクセントが現れ、文頭部が高くなる傾向がある。

○マツカシインジャ。（難しいんだ）

○ダイタリ オタリシテノー。

（抱いたり、おぶったりしてねー）

○インデ シマウ。（帰ってしまう）

○下ラレテ シマウキンナー。

（盗られてしまうからねー）

○ヤブガ ツカッテ シモーテナー。

（藪が浸ってしまっただねー）

③ 漸高型アクセントによって二語以上を一語にまとめる。これは、説明するまでもない当然の了解事項として表現し、聞き手の理解に要する負担を軽減しようとする配慮か。この現象は、発音が低く始まる場合に、アクセント単位（文節あるいは連文節）の最後の拍が高く発音される現象とも解釈される。イントネーションの問題でもある。

○カナモノヤガ…（金物屋が）

○シモツラニ…（下手に）

○ダレツチャ オラン（だれもいない）

○ハジメノウチワ…（最初しばらくは）

○タキノオクノ ヘンワ…  
（滝の奥〈地名〉のあたりは）

○ヨメシュートメガ…（嫁と姑とが一緒に）

○ミチノハタ（道ばた）

○キエタコトガ ナイ。（消えたことがない）

○ゲンキナデヨ。（元気ですよ）

## 4. 文法・表現法

### 1) 禁止表現

「レン・ラレン」を用いる禁止表現は、四国地方に広く見られるが、今回の聞き取りでは、あまり使わないという報告を得た。大人に対しては、「取ルナ」「取ッタライカン」などが普通であり、「取ラレンヨ」「取ラレンデヨ」などは、子供に言う場合に使うということであった。

### 2) 可能・不可能表現

下郡では頻繁に使われる、いわゆる「ら抜き言葉」は、少なくとも高齢者層には使われない。談話の中で自然に使われているのは「食ベラレン」などであった。

### 3) 原因・理由の表現

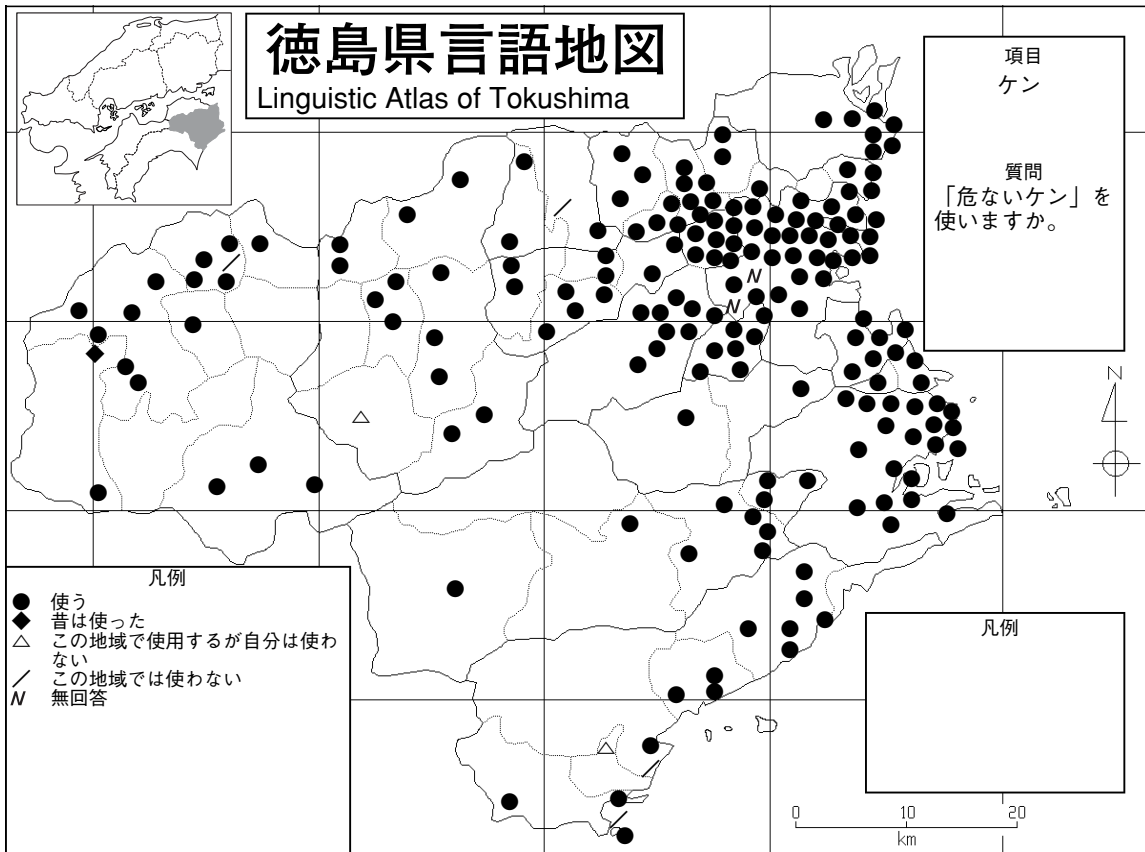


図1 「危ナイケン」を使いますか。

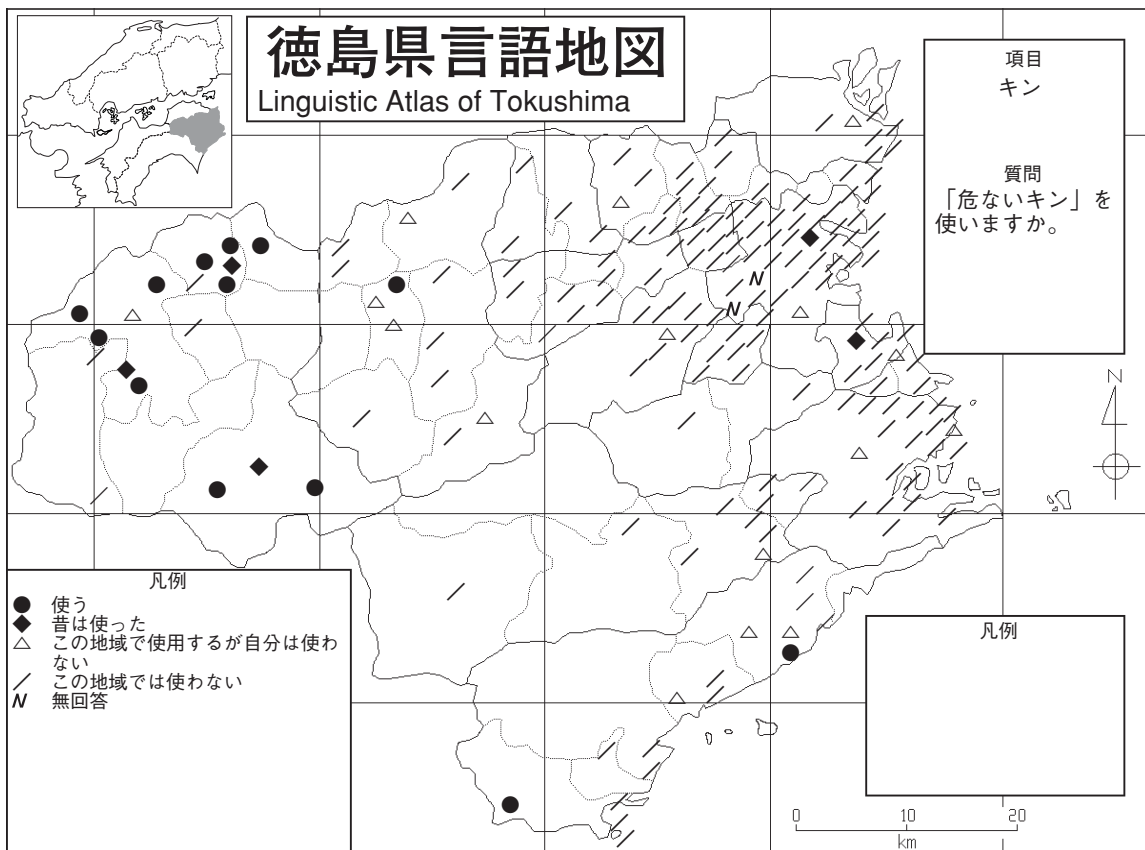


図2 「危ナイキン」を使いますか。

原因・理由をあらわす接続助詞として「キン・キニ」が使われるのが上郡の特徴であるが、今回の調査では「キン」は多く聞かれたものの、「キニ」は少なかった。

- アジガ チガウキンナー。(味が違うからね。)
- アキワ モー サンサイリョーリッチューンガ  
オーイキンナー。(秋はもう山菜料理っていう  
のが多いからねえ。)
- ジンカノ エサオ トッテ クーキニ (人家の  
餌を取って食うから)
- セキニンシャダツタキニ (責任者だったから)

また、森重幸による昭和30年代の調査に基づく報告(1982)では上郡、すなわち美馬・三好両郡が「キン・キニ」の使用地域になっているが、1999年の状況を『徳島県言語地図』(仙波・岸江・石田2002)で見ると、これらは三好郡および祖谷地方に限られつつあることが分かる(図1・2)。

三野町でも、「ケン・ケニ」の使用が確認できた。しかも、より高齢の方の談話に現れていることが興味深い。以下の例は、いずれも明治生まれの方の発話の中に見られた。

- アレガ ネヨーニ ウレル モンジャケン (あれがいい値で売れるもんだから)
- オカシヤ コーテ クレンケン (お菓子なんか  
買ってくれないから)
- カワヒキデ コー トルケニ ハヤイ。(〔柿の  
皮を〕皮引きでこう取るから速い。)

なお、これらの語は、文末近くで現れることが多く、しばしば弱く発音されるため、「キ」か「ケ」かの判断が困難な場合も少なくなかった。

#### 4) 形容動詞過去形

形容動詞の過去形が「～ナカッタ」になる。これは、徳島県の場合、上郡だけに現れる。

- ガイナ (丈夫な) → ガイナカッタ
- オーキナ (大きな) → オーキナカッタ

#### 5) ナ行変格活用<sup>い</sup>の残存

ナ行変格活用動詞(往ぬ・死ぬ)の終止連体形「イヌル・シヌル」を使用するかどうかについて、金沢治(1961)は、「死ぬは土着語としては、ナ行変格に使用して、四段での使用は稀」とし、森(1982)は、「往ぬる・死ぬる」が「山分と上郡年

配層」に見られることを報告している。60歳以上を対象とした調査であるが、仙波ほか(2002)によれば、山間部を中心に「使う」という回答が分布していて、三野町太刀野の回答者は、「往ぬる」については「使う」と回答している。今回の聞き取り調査では、高齢者にこうした表現がまだ残っていることが窺えた。

#### 6) 補助動詞的な「スル」

動詞連用形に「テスル」が続く表現で、「スル」が動作の継続や完了を表すと思われる表現方法がある。下の例で言えば、「貯めてする」は動作の継続を、「知られてした」は動作の完了を表すとも解釈できるであろう。このような形式の存在は、徳島方言の強調形式「～て～てする」(「走って走ってする」など)に繋がるものであろう。

- チットズツ 貯メテ ショルンジャケンドナ  
ー。(少しずつ(お金を)貯めて、準備をして  
いるんだけどね)
- カラスニ サキ シラレテ シタラ、ミナ ト  
ラレテシマウケンナ。(鳥に先に知られてしま  
ったら、皆、取られてしまうからね。)

#### 7) 文末詞

今ではいずれも高年齢層に限られるが、次の①④のような三好郡特有の表現や、上郡に固有の②③の表現が確認できる。

##### ① 優しい命令 ～デ

- コッチー キデ。(こちらへ きなさい。)

女性が(同等またはそれ以下の人)夫、弟妹、子供に対して用いる。男子は使わない。

##### ② 阿波の柔らかい疑問の「デ」に(カ・ゾ・ヨ)が付く。

- 人ガ 多イデカ?
- ドコ 行ッキョンデゾ?
- ナニ イイヨンデヨ?(何を言っているの)

##### ③ 上郡独特の断定の「デワ」がある。これは長上に対する丁寧な言い方である。

- 9時ワ ハヤスギルデワ。

##### ④ 疑問や断定、推定、勧誘などについて、さらに強調する働きのある「イナ」「イヤ」は古くから「三好言葉」と言われていたが、いささか品位に欠けるといふ評価もあったようだ(金沢治 1961)。

○ドシテイナ? (どうしてだい。どうしてなの?)  
男女とも用いる。

○ソレ 何イヤ? (それは何だい?)  
これは、男子のみが使用する。

○ソーデヤー アルマイガイヤ?  
(そうではないだろう?) 男子が使用する。

## 8) 古風な表現

高年齢層に限られ、三好郡では古風という印象を持たせる表現を次に挙げる。

### ① ～カラニ

○降りツヅイテカラニ オクレテシモタ。  
(雨が降り続いたために遅れてしまった。)

なお、このような「テ」に続く「カラニ」は、関西方面で広く使われていて、今なお、その使用が高齢者だけに限られない地方もあるようである(藤原1996)。

### ② イカナコト

○イカナコト ヒドー 刈りコンダモンジャンナー。(何とまあ、ひどく刈り込んだものだね。)

### ③ マコトニ ホンニ

○マコトニ ホンニ ムゴイコッチャ。(本当に実に むごたらしいことだ。)

### ④ 「オ～動詞の連用形」または「オ～ナハレ」

○キーツケテ オユキ。(気をつけておいでなさい)

### ⑤ 見舞いの言葉

○オアシライナハレ。(病気をいたわって養生なさい。)

この表現は、主として山分に広く分布しているが、実際には使われなくなりつつある(土壁 1967、その他、県内の各市町村誌、方言集を参照した)。

### ⑥ あいさつの言葉

○ゴシャメンナハレ。(ごめん下さい。)

○オカモイナシテ。(お構いなく。)

これは、訪問先でのもてなしを断わるあいさつ。

⑦ その他、述懐、引用などの折に出てくる言い方として次のようなものがある。なお、これらの言い方も三好郡に限定されるというわけではない。

○ゴザリマス

○ゾンジマス

○ナハンセ

○ゴロンジャレ (ご覧なさい)

○～デ コトタラン (～では済まない)

○タダコトナイ (異例のことで大変だ)

## 9) その他

直叙・細叙を避けて、聞き手の想像にまかせるのが日本古来の表現法であるという説があるが、三野町の人々の会話のなかで、次のような婉曲<sup>えんきよくろうか</sup> 麗化法が聞き取れた。このような表現は、高齢者の会話には特に現れやすいものであり、三野町方言に顕著な特色ということではないが、書き添えておく。

直接表現をはばかりるとき、または適当なことばが思い浮かばなかったときなどに「ナニ」を用いる。

○水ヲ消毒シタリ、ナニスルキンナー。(水を消毒したり、いろいろ手を加えるからね)

○ナニセナイカン チューテ 役場ノ ナンジャ係ガ ユーテナー。(届けをしなくてははいけないって役場の、それ、係が言ってね。)

○ドコゾイ ナニセナイカン チューテナ。(どこかへ捨てなければいけないって言ってね)

○イズミノ ナニワ コー モーテ ハイラナイカンキンナ。(井戸の内側は、こう、円筒形の石垣に足を入れて斜めに降りていかなければならないからね。)

## 5. 談話例

分析の資料とした談話の一部を示しておく。話者については女性をABCで、男性をXYZで示す。Kは方言班の金沢である。実際の談話をすべてカタカナで表記し、そこにアクセントを示すため、高く発音される部分に上線を付ける。なお、上郡アクセントでは、上下の区別その他、中段階を示す方が、よりよく実際の音調を再現できると考え、中にあたる部分には点線による上線を付けた。文末のイントネーションは、それが著しい場合に↗↘を付けて、上昇・下降を示した。「・・・」は、十分に聞き取れなかった部分である。また、カッコにくくって仮の共通語訳を補った。

### 1) イノシシの話①

相槌は省略した。

X ホレハ カシコイデー。(それは賢いよお。)

モー アノー ナンノ ホノ テモフミチッチュ

ーンワ ダイタイ キマツトンヨチー。 (もう、あの、何の、その、獣道っていうのは、だいたい決まってるんよなあ。) . . .

コレ デテクルキントテ ワチ カケルンヨ。 (これが出て来るといのでワナを掛けるんよ。) 赤タ ソコ 下ーランノ チー。 (そしたら、そこは通らないんだ、なあ。)

X イッガゲツワ 下ーラジノ。 (一ヶ月は通らないんだ。)

X ソノ キヨルアガナー、ハタケデ アノ イモツクツルヤロ。 (その来ているのがねえ、畑で、あの、芋を作っているだろ。)

ホタ コレ ウエタラ オリテキヨル ミチガツケンヨ。 (そしたら、これ植えたら降りてきている道が着くのよ。)

#### 《中略》

X ホタ ジンカノ エサオ トツテ クーギニアノ、モイイダガ ヨーナル ワケ。 (そしたら人家の餌を取って食うから、あの、生育が良くなるわけ。) ※「セイイクガ」の部分は [seiikuka] のように聞こえる。

X エイヨウガ マウン。 (栄養が回るの。) 赤イタ コー サンモ ニヒキハカ ウンミョラチンダ マツガー、ゴヒキ ロッビギ ウミダスンヨ。 (そしたら、こう、出産も二匹しか産んでいなかった奴が、五匹、六匹生み出すんだよ。)

#### 2) イノシシの話②

A マー ソノ イノシシモ ハツジョーシタ ジュブンニヤ ヨリツケンノデヨ。 (まあ、このイノシシも発情した時分には寄りつけないんですよ。)

アノー ワタシト オジーサント、オジーサンオーケナ サオ モツテチ、シヨルケンド ナンボモ ナンセンナー。 (あの、私とお爺さんと、お爺さんが大きな棹を持ってね、しているけどどうにも何しないねえ。)

モー ヤマノ スッタヨーナ アオガチー、ダラダラ デルン。 (もう、ヤマノイモをすったような泡がねえ、ダラダラ出るの。)

リョーホガ オンドーシガナ……。 (両方が、雄同士がね……。)

ホレデ ワタシ ホースノ ミズデ ハジツカケタラ、赤タラ オオガ エライテー……。 (それで、私がホースの水で打ちかけたら、そしたら顔が離れて……。)

#### 3) 桑の葉でゼンマイを育てる

K ゼンマイワ ドーデスカ、ゼンマイワ カイニクルツテ コトワ ナイン? (ゼンマイはどうですか? ゼンマイは買いに来るってことはないの?)

#### 《中略》

A イヤ、ヤマニモ ヨーケ ハエヨツタン。 (いや、山にもたくさん生えていたの。)

ケド モー ヤマノ デイレ センケニナ、キガオーケン ナツテ モー ゼンマイガ ハエンヨニ . . . (けれど、もう山の手入れをしないから、木が大きくなって、もうゼンマイが生えなく……。) ※「キガ」の発音は、[kiŋa]で鼻濁音が現れている。

X ムカシー アノー タツノヤマノ Sサンチュエー エトガナ、アノー ゼンマイオ イエデチ、ハヤスンジャッチューテチ、アノー チョードドナイスルンカ シランケンド、アノー ムカシカニコ コータラ ジョーゾーイクノー、アノー クワハガ ヨーケ デキルワチー。 (昔、あの、太刀野山のSさんて言う人がね、あの、ゼンマイを家でね、生やすんだって言ってね、あの、ちょうどどんなにするのか知らないけれど、あの、昔、蚕を飼ったら桑育の、あの桑葉がたくさん出来るよねえ。) ※「タツノヤマ」は「太刀野山」に違いないが、この発音は[tatunojama]のようにも聞こえる。

ソレオ ウチー ミナ トリニ キタデヨ。 (それを家へみんな取りに来ましたよ。)

ソレオ コー……。 (それを、こう……。)

#### 4) たばこ作りの話

B ヤッパリー、タネトリノ 赤ガ シューニユエーガ エーノ? ネエ、アードロ。 (やっぱり、種採りの方が収入がいい。ねえ、そうでしょ。)

タバコヨリワ。 (タバコよりは。)

A イヤナー、シューニユエツテ ユータ 下コロテ ミナ シン下イン、タバコツクリワ。 (い

えね、収入といったところで、皆苦しいの、タバコ作りは。)

アサカラ バンマデ タバコ ナカ ハイマールノワチー。(朝から晩までタバコの中を這い回るのねえ。)

ソフ オモイ シタラナ。(その思いをしたらね。)  
テユーテ マタ タネ ツクルンモ、ソノー バン  
ン サギョガ アルンジャッテ。(といて、また種を作るのも、その、晩に残業があるんですって。)

タネニ トツタノオ バンニナ、シラベタリ、  
・ ・ ・ ドレダケガ ソブチ、イツソ タバコノ  
ホーガ ラクナダロカッテ ユータリー。(種を採ったのを晩にね、調べたり…どれだけが、そのね、いっそタバコの方が楽だろうかって言ったり。)

## 6. 三野町方言語彙

品詞等の表示は、次のように示した。名詞→名、代名詞→代名、形容詞→形、形容動詞→形動、動詞→動五・動上一・動下一、副詞→副、感動詞→感、接続詞→接、助詞→助。

あお (名) 泡。

うめる (動下一) 見える。コンナノ オーサカデ  
ウメンテ、…ケシキガ ヨーテナ。(こんな  
の大阪で見えないって、…景色が良くてね。)  
「んめる」の方が普通だが、上郡では、この  
形も聞かれる。

うら (名) 私。俺。(希)

おごく (動五) 叱る。(古) オゴッキヤゲラレタ。  
(叱られた。)

おじゃみ (名) お手玉。

おぶける (動下一) 驚く。「オブケカヤル」は強調  
表現。

おみいさん (名) 雑炊。

お～動詞の連用形 対等以下の人に動作を促す表  
現。マー チョット ヤスンデ オイキ。  
(まあ少し休んで行きなさいよ。)

おんでんがえし (名) 仕返し。フユー ウラガ ト  
ルキニ オンデンガエシ イノシシニ クラ

イヨル。(冬、俺が獲るので仕返しをイノシ  
シに喰らっている。)

がいに (副) ひどく。ガイニムシニ クワレタワイ  
ヤ。(作物が虫にひどく食われたよ。)

がいな (形動) 【剛な】①健康な。ガイナカッタカ  
エ? (達者だったかい?) ②性格がきつい。  
キショーガ ガイナゾ。(気性がきついぞ。)

～がえ (文末) 詠嘆しての述懐するとき用いる。ヨ  
ーマットランデ キテシモータンジャガエ。  
(じっと待ってられなくて来てしまったん  
だよ。 「がい」とも。)

かがま (名) ひざ。

かす【漬す】(動五) 水に浸しておく。ミズニ カ  
シトイタラ ヤリコーニナル。(水に漬けて  
おくと柔らかくなる。)

かぶ【株】(名) 仲間。オマハンヤ トッショリノ  
カブニ ハイランワ。(年寄りの仲間には入  
らないよ。)

かまびしい (形) 騒がしい。ヨーケ アツマッテ  
カマビシーコッチャ。(大勢集まって騒がし  
い事だ。)

かもい (名) ①所帯・所属。カモイガ チガウキン  
ナー。(2) 専門分野。ソリヤーオマハンノ  
カモイジャ。③屋敷。カモイワ オオケナケ  
ンド ウチマワセコイ。(外見は大きいが、  
内情は苦しい。 「かまい」とも。)

～からに【故に】(助) 原因で。イランモンオ ヨ  
ーケ コーテキテカラニ……。 (不要なもの  
をたくさん買って来て困るじゃないか。)

がらくち【瓦礫地】(名) 石ころの多い土地。瓦礫  
地のなまり。

がらたち (名) ユリ科のつる植物であるサルトリイ  
バラ。この葉をかしわもちを包むのに用いる。

がんたら (名) 大みみず。

ぎすい (形) 性格がきつい。冷たい。また、そのよ  
うな顔つきをしている。

きどい (形) 気違い まだるっこい。

～きん (助) 原因・理由の接続助詞。～だから。阿  
波方言区画『上郡』の特徴語。上郡以外では、  
灘の一部を除いて使われない。アメガフルキ  
ン アソビニイケン。(雨が降るから 遊び



- に行けない。)
- きぶい (形) 傾斜が急な。キブイ 坂。
- く【処】(名) 所、場所。ココナクワ スーシーナ  
ー。(ここは涼しいねえ。)
- くいる【燻る】(動五) くすぶる。
- くそべい (形) 赤ちゃんのよく太っているさま。  
「重い」というのを忌んで、この語を使う。  
(古)
- くちやる (動五) しゃべる。「くちやくちや」の動  
詞化。
- くっせる【燻る】(動下一) くすぶる。
- くやく【口役】(名) 口説。苦情。不平。
- くるう【狂う】(動五) 子供が喜んで暴れること。  
コドモガ クルイヨッテ メイダンジャ。  
(子供が暴れていて壊したのだ。)
- けない (形) 金品の消耗が早いさま。マンサツモ  
クズシタラ ケナイモンジャ。(一万円札も  
くずしたらすぐ無くなる。)
- けんたい【兼帯】(形動) 平気で他人の権利を犯す  
さま。マンデ ケンタイデ トーンリヨル。  
(他人の地所をまるで当然のように通って  
いる。)
- 〜ござります (補動) 古い人のあいさつや言い草、  
他人のせりふの引用などに時々現れる。「〜  
なはんせ」「〜ぞんじます」「ごろんじゃれ」  
「ごしゃめんなして」なども同様。
- ごーれる (動下一) 壊れる。崩れる。「こーれる」  
とも。三好郡および隣接する愛媛・香川の一  
部で使われる。
- こかす (名) 麦ぬか。家畜の飼料とする。
- ごじゃ (形動・名) 擬態語「ごじゃごじゃ」から来  
たものか。間違い。でたらめ。
- こづく (動五) 咳く。「たぐる」とも。
- 〜こそ (助) 話し手にとって狭い、小さいと感じら  
れる数量に限られる意味。10円コソナイ。  
(10円しか無い。)[「はか」「ほか」とも。
- こっちゃ (代名) 中年男子の自称。
- ことたらん (句) 他に方法がない。仕方がない。ソ  
ーセナ コトタランワノー。(そうしなくて  
は仕方がないよなあ。)
- さどい【聡い】(形) すばしこい。小動物の動きな  
どの描写に用いる。
- さでる (動下一) 粉とか糠とか枯れ草とかがくっ  
ついて固まっているのを、もんだり、つまん  
だりしてほぐすこと。
- ざれる (動下一) 土砂などが崩れる。
- 〜して〜する (補動) ある動作、運動が継続中であ  
ることを言うとき、チットズツ タメテ シ  
ヨルンジャケンドナー。(少しずつ貯めてそ  
れに備えているんですがね。)
- してる【捨てる】(動下一) 落とす。紛失する。ゼ  
ニ シテナヨ。(お金を無くするなよ。)
- しときり【一きり】(名) 一時。「しとき」とも。
- しゃしゃらまご (名) ひ孫の子。玄孫。「やしやご」  
とも。
- しゃっきん (形動) どこも不具合なく十全だ。組織  
などが十全であることを「しゃっきり」とい  
うが、その語感と似ている。
- しゃっち (副) 必ず。きっと。シャッチ モンテク  
ルダロゾ (いずれ 必ず帰って来るだるう。)
- しわしわ (副) そろそろ。アブナイキン シワシワ  
イキナイヨ。(危ないからそろそろお行きな  
さいよ。)
- ずいろ (名) 潜水。(ズイロニイル) という。
- すぼき (名) ふくらはぎ。
- せんぐり (副) 次々に。セングリ ウエテイクワ  
ナー。(次々に植えていくよな。)
- そろ (名) 土箕 ジョーレンとも。
- だ (助) 文節の切れ目に付けて語調を整える。ホレ  
ガダ モー クセニ ナッテナー。(それが  
さ、もう、癖になってね。)
- たぐる (動五) 咳をする。「こづく」とも。
- たっすい (形) 程度が低すぎてつまらない。コドモ  
相手デチャー タッスカロデガ? (子供相手  
では張り合いがないでしょうか?)
- ちかしゅー (名・副) 最近。(古) ムカシワアッ  
タケンド チ々シューワ キカンナ。(昔は  
あったが最近は聞きませんね。)
- ちゃちー (名) インチキ。ずるいこと。
- ちりき【千力】滑車。チリキデ ウエイ ヒッパン  
リヤゲタ。(滑車で上へ引っ張り上げた。)
- つえる【潰】(動下一) 崩れる。

つくなむ【蹲む】(動五) しゃがむ。(つくまむ) とも。

つべ(名) しり。

つまい(形) 容器の蓋や栓が窮屈なさま。服やシャツなどにもいう。

で(文末) 柔らかい命令・指示(女性) ハヨーキデ。(はやくおいでなさい。)

〜ておれん(句) たまらない。サムーテオレン。(寒くてたまらない。)

でわ(文末) 丁寧な断定。対等から少し目上の人に対していう。ホーデワ。(そうですよ) 疑問の「でか」・「でぞ」も同等の待遇語であり、美馬・三好に多い文末助詞である。

てだこ(名) 転合。大阪弁のテンゴ。要らぬこと。テダコオスナ。(要らぬ手出しはするな。)

てんまい【手旨い】(形) ①うまくいった。テンマイコト ヤッタノー(うまくいったね。) ②便利だ。都合がよい。トイヨリ タンクノホーガ テンマイキン ツカワンヨーニナツタ。(樋よりもタンクの方が具合がいいからもうといは使わなくなった。)

どーだっそい(句) 「どうだすぞい」の短縮形。どんなもんだいと得意になって問いかけることば。やや古い言い方。

どしたん(句) 「どうしたの?」が約まった阿波弁。失望、心外、不審などいろいろな意味合いで用いられる。

どちらいか(句) こちらこそ。謝辞に対する謝辞。

なに【何】(代名) 適当な語の出て来ないとき、その代わりに用いる。ミノーイチノ ナニジャ、メイジンジャ。(三野町一番のあれだね、名人だね。)

なばえる(動下) 斜めにする。

なまくれ(名) 怠け者。

なべら(名) 平らな石。「八枚なべら」

にえこむ(動五) 車輪がぬかるみに入って動けなくなる。

ねから【根から】(副) 心底から。ソレワ ネカラスカンノジャ。(それは元々好きではないんだ。)  
「ねっから」とも。

ねんご(名) 口説。自慢。ネンゴーオ ユーナ。(えらそうなことを言うな。)

のす【伸す】(動五) タバコの葉などを乾燥して延ばすこと。イチマイワテ ノッショッタ。(一枚ずつ延ばしていた。)

はい(感動) 「早く」から来たことばと考えられる。動詞の命令形の後に付けて相手に行動を促す。文末につける。ハヨキナイ ハイ。(早く 来なさい、早く。母→幼児) 上郡独特のもの。

はっしゃぐ(動五) ①場面に興奮して陽気になる。②桶などのタガが乾燥して緩むこと。

ばばい(形) まぶしい。地域によって語形が異なる。「あまばい」「まばいい」とも。

ひどー【甚】(副) ①大変。ひどく。ヒドーハレトルデナイデカ。(スゴク腫れているじゃないの。) ②否定に続いて、さほど〜でない、あまり〜でない、の意となる。イマワ ヒドー イワンナ。(今はそれほど言わないね。)  
「やんだ」とも。

ひなず(名) 皮肉。

ひよろけ(名) 役たたず。おく病者。

ひんず(名) 余分。

へらこい(形) ①ずるい。②賢い。イヌモ ヘラコインジャ。(犬も賢いんだ。)

ほか(助) しか。僅かしかないことを示す。フタツホカ オラン。(二匹しかいない。)

ほだきんど(接) そうではあるが。阿波ことばとしては『ほなけんど』または『ほだけんど』であるが、当方言では逆接の助詞「きん」が現れる。

ほどよー【程良】(副) まんまと。うまいぐあいに。ホドヨー ミツカッテ オコラレタワ。(まんまと見つかって叱られたよ。)

ほんけ【本卦】(動形・名) 本当。「ほんま」、「まこと」とも。

まがる(動五) 邪魔になる。マガルケン ノケ。(邪魔になるからどけ。)

まくれる(動下) 転ぶ。落ちる。崩れ落ちる。

みじょー(副) 可能の副詞。オマエミジョー カタグカ。(お前、かつぐことができるかい。)

「みぞ」とも。〈古〉他に ヨー ヨマン。  
(読めない) エー ノボラン。(登れない)  
の「よー」「えー」がある。

めーる (動下) 見える。モット マエーダセー。  
メーンワ。(もっと前へ出せ。見えないよ。)  
母音のイにエが続くときは、前のイが消える  
傾向がある。

めげる (動下) 壊れる。

ものご【物籠】(名) 容器。ナンゾ、モノゴナイン  
カ。何か入れ物はないのか。中男→同)

もぶれる (動下) まつわりつく。アツイキン モ  
ブツクナ。(暑いから まつわりつくな。)

や (文末) 軽く促す気持ち。共通語と同じだが、自  
前の男性語として多用する。ヤスンデイケヤ。  
(休んでお行きよ。)

やにこい (形) 天候が怪しい。チョット ヤニコ  
ニ ナツテキタノー。(ちょっと 空模様か  
あやしくなってきたね)

よーや (副) やっと。ようやく、ヨーヤ マニオー  
タ。(危うく間にあった。)

よからよいも (句) 一晩中。夜遅くまで。

ろくい (形) 地面などが平らな。平坦な。主として  
山分の用語。

んめる (動下) 見える。「うめる」とも言うが、  
こちらの形がより多く使われる。

### 三野町 方言教示者

小笠美幸 (男)	太刀ノ山	大正12年生
宮本トラエ (女)	太刀ノ山	明治44年生
川原トモ子 (女)	柴生上東	昭和12年生
小松正美 (男)	太刀野	明治45年生
土井書雄 (男)	勢力	大正15年生

久保清正 (男) 太刀野 明治44年生

新名 馨 (男) 加茂谷 大正 7年生

### 文 献

小野米一編 (1996) : 鳴門教育大学国語学 (現代語研究) 報告  
2 『徳島県北部方言の談話資料』小野米一。

金沢治 (1961) : 『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図  
書館。

—— (1976) : 『阿波言葉の辞典』小山助学館。

金沢浩生 (1993) : 「三好町の方言」『総合学術調査報告 三  
好町 郷土研究発表会紀要39号』阿波学会・徳島県立図書館。

金沢浩生・仙波光明・岸江信介・石田祐子 (2000) : 「神山町  
の方言」『総合学術調査報告 神山町 阿波学会紀要 第46  
号』阿波学会・徳島県立図書館。

金沢浩生・仙波光明・岩佐美紀・石田祐子 (2001) : 「相生町  
の方言」『総合学術調査報告 相生町 阿波学会紀要 第47  
号』阿波学会・徳島県立図書館。

金沢浩生・仙波光明・西村美保・石田祐子 (2002) : 「佐那河  
内村の方言」『阿波学会紀要 第48号 佐那河内村 総合学  
術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館。

仙波光明・岸江信介・石田祐子編 (2002) : 『徳島県言語地図』  
徳島大学国語学研究室。

土壁重信 (1976) : 『消え去りゆく大里言葉』土壁重信。

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部  
(2001) : 『日本国語大辞典 第二版』小学館。

平山輝男他 (1992) : 『現代日本語方言大辞典』明治書院。

平山輝男・上野和昭 (1997) : 『徳島県のことば』明治書院。

藤原与一 (1996) : 『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—』  
東京堂出版。

森重幸 (1962) : 「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報  
告会資料。

—— (1982) : 「徳島県の方言」『講座方言学11 中国四国  
地方の方言』国書刊行会。

終わりに、この稿の分担を記しておく。全体の基  
本的な構成および方言語彙の選定は、金沢が行った。  
岸江は、アクセントの体系のみを執筆した。石田は、  
音声面の特徴の検討を行った。最終的なまとめは仙  
波が行った。 (文責 仙波光明)